

不登校児と定時制課程

研究協力員 菅 龍 一

(一)

昨年10月19日高校教育会館主催のシンポジウム「開かれた学校」で不登校児の話をしたところ、参加者から反響が寄せられた。編集者からの要望もあり、その話をまとめておきたい。

私が不登校に関心を持ったのは、今から十年前に神奈川県教育文化研究所の「親と教師のための教育相談室」相談委員を引き受けてからであった。この相談室の開設以来、相談内容のトップは不登校問題だった。私達相談委員は、当時横浜富士見中学で不登校児学級を担当していた永田先生を招いて学習会を開いた。

永田先生は貴重な経験を数多く話されたが、そのなかで一番印象に残ったのはつぎのような指摘であった。

「登校拒否児にとって、学校とは刑務所や病院のイメージなんです。白く巨大なコンクリートの建物。なかで働く教師は看守や医者に見えるんです。

彼らが学級に来られるようにするためには、教室をこうしたイメージとは逆の家庭に近いものにするのがいい。建物もプレハブ校舎がいいし、教室の入口にのれんを掛けるとか、教室のうしろ半分に畳を敷くとかすると、彼らは安らぐんですよ」

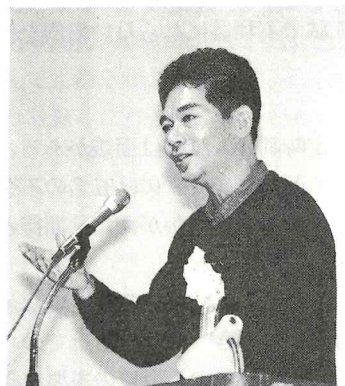
私はなるほどと納得し、軽い冗談のつもりで、

「じゃ、その畳の上にコタツでも置けば、なおいいですね」

という、永田先生は、

「あなた、よく判るじゃないですか。今年の冬はコタツを入れようと、私も思っているんですよ」と笑った。

ふと私は、全日制に比べると定時制は刑務所・病院的イメージよりも家庭に近いのではないかと考えた。昼間は陽光に白い巨大な校舎が光っている。教室も制服の生徒たちで満員だし、教師の服装もきちんとしている。だが夜間定時制は暮色に包まれ、電灯の光の輪の下に十数人の私服の生徒がちらほらと坐っている。教師の服装も、どちらが生徒か先生か判らないようなラフなのが多い。定時制高校という空間は、不登校の生徒にとっては全日制より過しやすいのではないかと考えたのだった。



(二)

その頃私は湘南高校定時制に転勤したばかりだった。湘南定時は募集定員を上廻る志願者のある学校である。私はひそかに過去数年間の入試のデータ、合格者の進級・卒業・進路などを調べていった。

その結果判ったことは、まず第一にボーダーライン近くの不登校児は明らかに不利な扱いを受けていることである。むしろこれは、教師たちを責めるわけにはいかない。中学でほとんど学校に行けなかった子どもと、皆勤に近い子どもが同じ水準の成績であれば、後者を合格させようとするのが人情というものだろう。進級や卒業できる確率も後者のほうが高いと見るのは自然な判断である。

だが入学した不登校児とその他の生徒の間では、進級率・卒業率ともほとんど統計的に有意の差はなかった。中学の不登校児が高校でも学校に来られず、やがて退学していく割合と、その他の生徒が怠学や非行、転居や転職などによって辞めていく割合はほぼ同じであった。

うっかりすると見落すところであったが、大変な差のある事実には気がついた。それは上級学校への進学率である。意外にもかつての不登校児のほうが圧倒的に高かった。数倍の進学率だった。

これはいったいなにを意味するのだろうか。私は、不登校児が定時制で再生したということは、その生徒の人生にとって劇的な転回であり、それによって、自信を回復したのだと判断した。だとすれば、定時制で再生のチャンスを与えることはきわめて教育的なことである。今後は不登校児が入試で不利益にならない慣例を作りたいと思った。

(三)

定時制の入試には面接がある。私は不登校児についてとくに時間を割いて、ていねいに面接した。私の面接グループには五名の不登校児がいたが、私の予想どおり定時制にたいして期待をもっていることが十分うかがえた。期待というより、それが最後の希望のよりどころであるという切迫した想いが感じられた。

私の質問にたいする答えのなかで、ほぼ全員が同じ反応を示したことが二つある。一つは、もし合格したとき、通学する上での心配事は何かと聞くと「暴力行為やいじめ」と答えたことである。これは中学での不登校の主要な原因がいじめであったことを示すものだろう。

もう一つは、卒業できたとしたら、その後の進路をどう考えているかという質問だった。これにたいしては「上級学校」と答え、なかにははっきり「大学」と答えた生徒もいた。

判定会議で、私は五人の生徒たちを合格させるよう主張した。もし合格すれば、この生徒たちを自分の学級に入れて面倒を見るつもりだともいった。多少の反対意見もあったが、全員が合格ライン内だったので無事入学が許可された。

(四)

このときの五人のなかのアキラの再生の軌跡を追ってみたい。アキラは小学校の高学年から不登校になった。中学もほとんど出席できず、思いあまった母親が関西の親類にあずけて転校させたという。しかしアキラは淋しくなって自宅へ逃げ帰った。アキラを辛うじて学校につないでいたのは、ある養護学校の訪問学級だった。ここで定時制高校の存在を知り、受験してきたのだった。

アキラは入学当初は弱々しい感じだった。だが、一学期の終わりにはクラスにとけ込んでいった。二年生のクラス編成のとき、私は念のためアキラたちを私の学級に残すようにした。この二年の間、私が彼らにしたことは大したことではない。教室や食堂などで声をかけるぐらいだった。

三年生になると、私はアキラたちを他のクラスに移した。私が担任なしの学年主任になったからでもある。アキラは若い体育教師の学級に入った。今考えると、これが良かったと思う。一、二

年生のときはひ弱な優等生だったアキラが、スポーツマンに変身する。そして三年生の後半になると野球部の主将になり、さらには生徒会の副会長に立候補して当選したのだった。

四年生になると、アキラは大学受験の相談にやってきた。愛知県にある福祉系の大学に行きたいという。将来、かつての自分のような子どもたちのために働きたいといった。家も豊かではないので、二部を受験し、働きながら学ぶつもりだった。私はむろん賛成した。無事に合格し、翌春愛知へと向かっていった。この年アキラの他にも、二名のもと不登校児が地元の大学二部に入学した。

(五)

アキラが大学進学して一年後、私はある公民館から講演依頼を受ける。テーマは＜不登校＞だった。このとき公民館の担当者から、不登校から再生した生徒がいたら連れて来て欲しいといわれた。聴衆が不登校児の母たちなので、生証人を見せれば安心するだろうというわけである。

私は春休みに帰省したアキラに公民館の依頼を話した。するとアキラは快くこれを引き受けてくれたのだった。

講演会の冒頭、私はアキラを紹介し、一言挨拶するようにといった。彼の挨拶はつぎのような内容だった。

「ホクが今日ここに来るといったら、母がとても心配そうにしていました。大丈夫だよという、喜んでくれました。そして、この席には、もとの自分のお母さんたちが集まっているに違いない。それなら、もと登校拒否児の母である私のメッセージを伝えてくれと頼まれました。

『子どもが登校拒否になると母親は苦しいものです。私も泣いたり怒ったりしました。しかし今の息子を見ていると、そんな私の態度は何の役にも立たなかったことが判ります。息子が立ち直ったのは、息子のなかにある回復力のせいだと思います。どうかみなさんも子どもの回復力を信じて、あせったり、いらいらしたりせず、暖かい気持ちで見守ってあげて下さい』

これがボクの母からのメッセージです」

何人かの聴衆がハンドバッグからハンカチをとり出し、目頭を押さえていた。

講演が終わったあと、私はもう一度アキラに水を向けた。

「さっきはお母さんからのメッセージだったけど、こんどは君がみなさんに伝えたいことをいつてみないか」

すると、アキラはこんな話をした。

「ボクは小さいときから母が好きでした。やさしい母でした。しかしボクが不登校になると母が変わりました。泣いたり、叱ったり、ぶったりしました。ボクは母にふたれたことより、ボクのせいで母が変わったこと、ボクのせいで母が泣いたり、ぶったりする、そのことが辛かったのです。

ボクが、これからどうしたらいいのか。どうすれば人生が切り拓けるのか。そのことはボク自身が一番真剣に考えているのだから、お母さんまでが悩むことはないんだ。お母さんは自分の好きなことや楽しいことを見つけて、自分の生甲斐を考えて欲しい。そう思いました。みなさんもそうして下さい。そのほうが子どもは救われるのです」

今度は前よりももっと多くの母親たちがハンカチで目頭を押さえていた。

高校の主流である全日制から少し外れた傍流である定時制課程や通信制課程が不登校児の再生の場所としてもっと見直されてもよいのではなかろうか。(すが りゅういち 和光大学講師・作家)

主な著書：『教育の原型を求めて』(朝日新聞社) 『親とたたかう』(ちくま書房) 『善財童子ものがたり』(偕成社) 『おじいさんの手』(太郎次郎社) 『父親40歳からの出発』(ダイヤモンド社) 『人生最後の輝きとしての死』(看護の科学社)

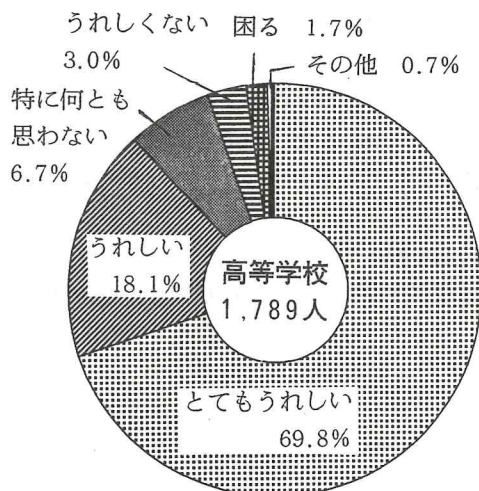
学校5日制を高校生はどうみるか

県教委のアンケート結果より

学校5日制は1991年10月に自民党「学校5日制小委員会」が1992年9月から実施の方向性を打ち出し、12月には文部省調査研究協力者会議が学校5日制の実施へ向けた「中間まとめ」を出してから急速に実施へと動き出した。学校現場では戸惑うところも多く、県下20校の「学校運営のあり方等実践研究校」を除く多くの高校ではまだ十分な検討がなされていない模様である。1992年1月に神高教の実施した緊急調査によると、来年度に向けて総単位数を90単位以下としたところが、68校中15校（全日制高校）と少ない（中間集計）。

県教委が設置した「学校5日制を展望した児童・生徒の校外生活に関する研究協議会」が、1991年7月から9月にかけて、「学校運営のあり方等実践研究校」（小・中学校、高等学校、盲・ろう・養護学校：計108校）を通して児童・生徒や父母・教職員等を対象（計14,754人）に「学校5日制に関するアンケート調査」を実施した。回収率は92.0%で、そのうち高校生の回答者数は1,789人にのぼる。

ここでは、学校現場での検討の参考にさせていただくために、高校生の声を中心に紹介したい。次のグラフは、「あなたは、土曜日に学校が休みになるとしたら、どう思いますか。」との問に対する高校生の答である。



学校5日制を歓迎する高校生は87.9%と、児童・生徒全体の84.5%と比べても多い。賛成した生徒の理由（2つまでの複数回答）は、トップが「自由な時間が増えるから」(66.0%)と答え、次が「心身をゆっくり休ませられるから」(30.0%)と答えている。「塾や予備校、習いごとにいけるから」(1.9%)「アルバイトができるから」(3.4%)は、ともに少ない。現在、土曜日に「学校の部（クラブ）活動や塾・習いごとに行く」高校生は40.9%と多いが、5日制になったら「いく」と考えている者は15.3%と少なくなっている。

少数派の5日制反対の高校生（4.7%）はその理由（2つまで複数回答）に、「友達に会えないから」(33.3%)「部活動などがきつくなるから」(33.3%)「休みにになった土曜日の授業がほかの日に上乗せされそうだから」(32.1%)をあげている。また、「土曜日に学校が休みにになったら、大人（親も含む）はどうあってほしいと思いますか。」との問に対して、57.1%の高校生が「子どものすることに口出しや手出しをせず、自由にさせてほしい」と答えている。

障害児教育で論議

日教組全国教研集会開催される

1992年1月24日から27日まで千葉県白子町で第41次日教組全国教研集会が開催され、約8千名の教職員等が集まって、1日目の全体集会後、25の分科会に分かれて3日間にわたって熱心な議論が展開された。

第14分科会は障害児教育をテーマに、小・中学校の特殊学級や普通学級で障害児を受け入れている学校や養護学校の先生方、青い芝の会の障害児・者の方々さらに障害児の父母が白熱した議論を展開した。共に学び共に生きることの意義が鋭く問われていた。

今日では、障害児の高校に進学する希望が増えるとともに、全国各地で定時制や一部の全日制高校で障害児が共に学ぶようになってきている。「なぜ障害児が高校で学ぶか」を改めて問うとともに、「0点でも高校へ」をスローガンに取り組んでいる報告が目立った。